

『平家正節』所載の二拍名詞における 助詞「の」接続形アクセント

上野和昭

0. 二拍名詞の助詞「の」接続形アクセントは、その名詞の類別によって複雑な様相を呈する。たとえば、第二類名詞の場合は、古来●○▽だったものが、中世後期以降、語単独のアクセントが同じ●○型になった第三類名詞における助詞「の」接続形●●▼に類推して変化したと説かれる。また、この形の連体的表現効果をあげるためにアクセントが平板化したということも言われている。一方、第三類名詞は○○▽から●●▼に変化したがる、これも後続する語によって低起式の語が続く場合には●●▼になり、高起式の語が続く場合には●●▼となったとされる。そのうち表現効果に優れる●●▼が盛んになって今日に至ると説明される（金田一春彦1971：11-14）。なお、アクセントの高拍を●、同じく低拍を○であらわす。とくに助詞であることを示すときは、▼▽を用いる。以下同様）。

『(平家)正節』の《白声・口説》に載る二拍名詞は助詞「の」接続形アクセントの変遷の中で、どのような位置を占めるのであろうか。また、類別を決定する上に、助詞「の」接続形はどこまで有効なのか。このような問題を明らかにするために、『正節』の用例を整理して検討する。

同様な問題は、第四類名詞の助詞「の」接続形アクセントにもあって、○●▽から○○▼へと置き換わるのも平板化で説明される（同：16）。とくに第四類相当の語の場合は和語と漢語の区別があり、和語は○●▽、漢語は○●▼～○○▼になることが言われている（桜井1976：280-306）。その流れの中で『正節』所載例の占める位置、また第五類名詞との違いなどについても検討したが、ここでは紙幅の都合で結論のみ記す。

1. 問題となる語がアクセント史上、第二類相当の語であるか、それとも第三類相当の語であるかは、『正節』の譜記を検討するにせよ、単独形はもちろん、助辞や接辞が接続した形からも、これを区別することは出来ない。しかし、助詞「の」接続形に関しては、すでに語単独の場合に失われた区別を残している可能性がある。

そこでまず《早(稲田)語類2》と認定された(「2×」「2か」なども含む。以下同様)もので『正節』《白声・口説》にあらわれる語彙について検討する。このうち助詞「の」接続形であらわれるものは26語ある。曲節・アクセント別の語数を示せば【表1】のとおり。「奈良」(地名)も固有名詞ながら一応数に加えてある。そのほか複合語的なものの中にあられる場合の数(外数)

【表1】『平家正節』所載の二拍名詞第二類相当の助詞「の」接続形アクセント（和語）

語	漢字表記	類別	●○▽		●●▽		●●▼		その他
			白声	口説	白声	口説	白声	口説	
いし	【石】	(w2)	1	1					
いは	【岩】	(w2)			*1				
かた	【形】	(w2)	1	3					
きた	【北】	(w2)	3+12	1+38					(+A)
くら	【鞍】	(w2)					2		
たび	【旅】	(w2)		2					
ため	【為】	(w2)	1						
つぎ	【次】	(w2)	1	7					
なつ	【夏】	(w2)		2					
はし	【橋】	(w2)					1		
ひぢ	【臂】	(w2)	1						
ひる	【昼】	(w2)	1	1					
ふみ	【文】	(w2)						2	
ふゆ	【冬】	(w2)		1					
みつ	【三】	(w2)		3					
やへ	【八重】	(w2)		1					
ゆき	【雪】	(w2)					1		
うち	【内・中】	(w2×)	3	5			*1		
かど	【門】	(w2×)	1						
ころ	【頃】	(w2×)					1		
せみ	【蟬】	(w2×)					*1		
なら	【奈良】	地名 (w2×)	1	3+1					(+B)
ひと	【人】	(w2×)	12	30			4	1	
うへ	【上】	(w2か)	1	+2			2	4	(+C)
てら	【寺】	(w2か)		+2					(+D)
とも	【供】	(w2か)	1			1			
延語数合計			28(+12)	60(+43)	1	1	13	7	0
			88(+55)		2		20		
異語数合計			13	13(+2)	1	1	8	3	0
			18(+1)		2		9		

注1 【表1～3-2】類別欄のwは《早稲田語類》を、kは《金田一語類》をあらわす。類別はwを主とし、kで補う。

『正節』の譜記から、その類別を認定ができない場合には()で括って示した。以下同様。

注2 (+A) きたのかた【北方】、きたのまんどころ【北政所】(+B) ならのみかど【奈良帝】(+C) うへのはかま【表袴】(+D) てら【寺】寺名(三井寺)

注3 「いは」【岩】*岩の挟にてそ{上上×上上××××}灌頂女出20-3素声、尾京A「岩の」{上上上}

注4 「うち」【内・中】*身の中_の熱_き事{上上上上上上××××}12下道逝6-2白声〔「身の中のあつき事は」尾早京A{同}〕

注5 「せみ」【蟬】*蟬の如くに{××上××××}揃物大衆28-5口説〔尾早京A{同}〕

は+のあとに追記した。具体的な語形は右枠外の記号と対応する下欄注記を参照されたい。

延べ語数とアクセントとの関係は全110例中、●○▽：●●▼が88例：20例（その他2例、追記分を加えると143:20）である。曲節別に見ると、《白声》28例：13例（40:13）に対して《口説》60例：7例（103:7）で、断然《口説》における●○▽の比率が高いが、《白声》でも6割から7割は●○▽である。●●▼の例のうち、「岩」1例は表下欄に注記したように他本によって訂正されてよいものであるから、実際には「供」1例と考えられる。「うち」の●●▼1例は「身の内の」という例で、4拍の連語が助詞「の」を接続させていると考えるべきか。「蟬」の例はいわゆる「特殊低起式」の譜記で旋律的な制約が加わったもの。アクセントとしては●●▼とみてよいであろう。

異なり語数をみると25語中15語（追記分を加えると26語中16語）までが●○▽と解釈すべき譜記しか記されていない。●○▽と●●▼両方の譜記が見られるのは「内、上、人」の3語、「供」は●●▼と●○▽とが各1例、●●▼だけなのは「(岩)、鞍、橋、文、雪、頃」の6語、これに「蟬」を加えれば7語である。このうち「うへ(上)」は《早語類2か》とされるもので、古来●○型と●●型とが並存した模様。現代京都では●●(『日本語アクセント史総合資料 索引篇』所載の京都アクセント、以下「索篇」)。『日本国語大辞典』第二版所載の京都アクセント、以下「日国」。中井2002所載の京都アクセント、以下「中井」による)。「供」●●▼1例は第二類相当の語にあっては例外的で、あるいは「友」と混同したかと疑われる。

(1) 供_モの宮人<ミヤヒト>{上上×××××}2下青山2-1口説

第二類相当の語に助詞「の」が付けば、本来は●○▽であるところ、後続する語と接続して平板化が進行し、●●▼も聞かれるようになったと考えられる。これについてはまた、語単独のアクセント型が●○で第三類相当の諸語と同じであることから、それへと類推したという面もあること既に述べた。『正節』は、その過渡的な様子を見せている。

2. 続いて《早語類3》と認定されたもので『正節』《白声・口説》に助詞「の」接続形であられる語彙(48語)について検討する(《金田一語類》3*「孫」も含む)。この中には漢語3語「かち(褐)・きん(琴)・びは(琵琶)」もあるが、ひとまず和語(45語)を対象にして【表2】にまとめる。これによると第三類相当の語の場合は、ほとんどが●●▼である。●○▽はきわめて少ない(6語7例)。第二類相当の諸語にみられた様子とは著しく異なった傾向を見せている。

【表2】で「その他」としたもののうち、「麻」は《早語類3△》で古くは○○ながら中世後期以降は○●に転じ、現代京都も同様らしい(中井、索篇。ただし日国は●●とする)ので、ここでの検討からは除外する。また「事」の異例は他の『正節』系諸本に譜記のないところで、東大本の誤記と思われる⁽¹⁾。

また「波」には●●▼の例(白(声)1口(説)4、以下用例数を曲節別にあらわすときは、このよ

【表2】『平家正節』所載の二拍名詞第三類相当の助詞「の」接続形アクセント（和語）

語	漢字表記	類別	●○▽		●●▽		●●▼		その他
			白声	口説	白声	口説	白声	口説	
あす	【明日】	(w3)						3	
いけ	【池】	(w3)					+4	1+3	(+A)
いぬ	【戌】	(w3)						+5	(+B)
いへ	【家】	(w3)			+2	+14	2	2	(+C)
うま	【馬】	(w3)					14	5	
うま	【午】	(w3)*						+4	(+D)
おや	【親】	(w3)					1	2	
かみ	【髪】	(w3)					1		
きし	【岸】	(w3)					1	1	
くさ	【草】	(w3)					1	1	
くら	【蔵】	(w3)					+1	+3	(+E)
こけ	【苔】	(w3)					2		
こと	【事】	(w3)		1			5	5+3	*1 (+F)
こと	【言】	(w3)			+1				(+G)
した	【舌】	(w3)					1		
しほ	【潮】	(w3)					1		
しま	【島】	(w3)					2	1	
つき	【月】	(w3)						2	
つち	【土】	(w3)						1	
つな	【綱】	(w3)						1	
とき	【時】	(w3)					7	2	
とし	【年】	(w3)					2	2	
なみ	【波】	(w3)			*1	4	3		
はか	【墓】	(w3)						1	
はま	【浜】	(w3)					1		
ふし	【節】	(w3)						1	
みみ	【耳】	(w3)						*1	(+H)
もと	【元・本】	(w3)					2	4	
もの	【物・者】	(w3)			+8	+16	2	6	(+I)
やま	【山】	(w3)				+1	+4	3+2	(+J)
ゆみ	【弓】	(w3)					6	1	
ゆめ	【夢】	(w3)					3	3	
くも	【雲】	(w3×)					1	2+1	(+K)
しし	【鹿】	(w3×)					1+1	+1	(+L)
せき	【関】	(w3×)		1			1	1	
たち	【太刀】	(w3×)						1	
との	【殿】	(w3×)						1	
はと	【鳩】	(w3×)		1					
ふじ	【富士】	山名 (w3×)	1	1					
あさ	【麻】	(w3△)							*1 (+M)
たま	【玉】	(w3△)				+2			
のち	【後】	(w3△)					1		
おき	【沖】	(w3△)					1	3	
もも	【百】	(w3#)		1					
まご	【孫】	(k3*)		1					
延語数合計			1	6	1(+11)	4(+33)	62(+10)	57(+22)	2
異語数合計			7	6	5(+44)	1(+4)	119(+32)	27(+4)	2
			6		1(+5)		35(+3)		

注1 「うま」【午】の類別は【早語類】で認めていないが、いま「馬」と同じに処理する。

注2 (+A) いけの～【池の大納言・中納言】、いけのぜんに【池の禰尼】(+B) いぬのこく【成刻】(+C) いへこの【家の子】(+D) うまのこく【午刻】(+E) くらのかみ【内蔵の頭】(*1例他本により訂正) (+F) ことのほか【殊外】(+G) ことのは【言葉】(+H) おんみみ【御耳】(+I) もののく【物具】、おんもののか(ども)【御物怪(共)】、ものふ(ども)【武士(共)】

(+J) やま【山】寺名、やま【山】人名、やまのうち【山内】人名、やまのて【山手】(+K) くものうへびと【雲の上人】(+L) ししのたに【鹿谷】地名(+M) たまのめ【玉井】人名

注3 「こと」【事】*事の出来く<?>よかし{×上××コ××××}揃物朝敵1-4口説【早・尾・京「事」】{諸なし}

注4 「みみ」【耳】*御耳の余所く<?>にぞ{××××上コ××××}5上殿幸3-2口説、いわゆる「特殊低起式表記」の例。

注5 「あさ」【麻】*麻の衣を{×上×××××}読上康頼10-5シロ

うに表示すると、●●▼の例（白3）がある。下記（2）の第一例は東大本と芸大本とが●●▼を反映する施譜で、尾崎本や岡正武校合本（京大本）・浄書本（早大本）はほかの箇所《白声》2例と同譜である。もし尾崎本ほかの譜記によって東大本などの譜記を訂正するならば、《口説》の2例のみが●●▼と解せられるから、この「波の上」という句にかぎっては、《白声》●●▼：《口説》●●▼という対応があるということになる。《口説》の譜記は、平曲草創期以来の「波の上」○△●○>●●▼○○という伝統的音調が残ったのかもしれない。また単に「波の」が○○▼>●●▼と変化したものとも考えられる。しかし、文節単位で変化を経たならば、第三類相当の語に●●▼と対応する譜記がもっと多く見られてよいのではなかろうか。それが和語ではあまりあらわれない。あっても熟語や地名・人名などの中にみられる程度でしかない（「家の子・言の葉・玉の井・物の具・山の内」など）。

- (2) 波の上に{上上××××}6下山幸18-1白声〔芸{同}、尾早京A{上上上上××}〕／浪のうへに{上上上×××}15上三日25-2素声／浪の上へに{上コ××××}15下門渡2-1口説

さて助詞「の」接続形●○▼をとる4語のうち「富士」はよく知られた固有名詞であるから一緒に扱うことは控える。「関」の例は、「関の戸」で函谷関を指すことから、あるいは「クワン」を意図した施譜がなされていたのを、のちに「せきのと」と読んで、譜はそのままにした可能性はないかと疑う。東大本・尾崎本は本文「関の戸」であるが、岡正武系の二本に「せきのと」と仮名書きされている。「関」は漢音クワン（平声全清）であるから、近世●○であって問題ない⁽²⁾。『(言語)国訛』に「関東ナトノ類上ニアル関ハ去声ニ響 函谷関ナトノ類下ニアル関ハ平声ニ響クナリ」（49）とあるのは、『正節』の譜記から解するに「関東」●○○○、「函谷関」●○○○○であるから、下線のような●○を「去声」、○○のような平らな音調を「平声」といったものである（秋永1983:75）。残る「鳩・百」はいずれも「鳩杖・百媚」の訓読に由来する語であるから、あまり日常的でない語句を語って聞かせる場合には語単独のアクセントを生かすようなことがあったとしても不思議ではない。また「孫」は《金田一語類》で「平安朝の文献でまだ例証されていない語」として第三類に所属しており、鹿児島でもB型（平山1960）である。しかし、ここは（3）の第四例に示すように「孫である～」という同格の用法であることに注目したい。このことが、一般的な所属・所有などとは異なる語単独のアクセントをとらせたのであろう。

- (3) 関の戸を{上××××}揃物大衆21-2口説〔尾{同}、早京「せきのとを」{コ××××}〕／鳩の杖に{上×××××}揃物大衆34-1口説／百<モ>の媚ど{コ××××}7上烽火28-4口説／孫の右少将（雅方）{コ××上××××} 10上臣流25-2口説

3. 以上の和語についての考察から、助詞「の」接続形アクセントにおいては、第二類とはっきりしている語の場合、●○▼が優勢であることが分かった。また第三類とはっきりしている語の

場合は、とくに理由のあるもの以外すべて●●▼であった。一部●●▽もあったが、それは「供の宮人」「波の上」あるいは熟語、人名・地名などにあらわれる。

それでは同じ和語でも類別のはっきりしない語はどうであろうか。『正節』にあらわれる形によって●○型であることがすでに分っている語（しかも助詞「の」接続形をとる語）は、地名・人名などの固有名詞を除くとわずかに7語、「うは(上)・だけ(嶽)・とみ(富)・とよ(豊)・なぎ(柵=植物名)」（助詞「の」接続形●○▽）と「おひ(笈)・とき(関)」（同●●▼）だけである。これまでの考察からすると●○▽は原則として第三類相当の語にはないから、「上・嶽」などはもと第二類だったと一応は考えられる。これに対して「笈・関」は第三類であった可能性が高い。「笈」は、語源を「負ひ」とみるなら二類動詞の連用形が名詞化したもので、○○>●○の変化を経たと考えられるから問題ない。「関」の語源は明らかでないが、鹿児島B型であることから方言アクセントの対応はもと第三類とみるに支障はなさそうである。一方「うは(上)」は「うはの空とや{上×××コ××}」（4上小督23-3口説・37-2口説）から抽出したもので、独立した語とは見なせないが、「空」に卓立した施譜がなされているので、ここで扱うことにした。「うへ(上)」との関係から第二類相当とみておく。「嶽」は古く○●（人紀＝鈴木2003ほか）。現代京都は●○（索篇・日国）で、中世以降いずれかのときに第二類相当へ移行したと思われる。奥村(1993:48・53)に引かれる「富・豊」はそれぞれ「富の小路(人名)・豊の明り」から抽出したもので、むしろ6拍語として捉えたい。「富・豊」はいずれも第三類相当であり、ここで扱うならば助詞「の」接続形が●○▽であることは動かないが、それは人名や熟語の一部になりきっているからではないか。「柵」については不明。

以上から特に事情がないかぎり、類別の不明な普通名詞にも「第二類相当●○▽(一部●●▼も)：第三類相当●●▼」という対応は、ほぼ当てはまるとみてよいであろう⁽³⁾。

4. つぎに固有名詞（国名・姓地名・人名など）についても見ておこう（一部【表2】に追記したものは除く）。これらもまずは語単独で●○型と分かっているものを扱う。このうち助詞「の」接続形が●○▽をとるものは「安摩・伊勢・鹿瀬・狩野・気比・佐渡・志保・出羽・土佐・土肥・丹生(にふ)・仁井・沼田(ぬた)・能美(のみ)・氷見・堀・依田」の17語、同じく●●▼をとるのは「木曾・嵯峨・那智」の3語である。固有名詞でも●●▼をとるものは、第三類相当である可能性が高いと思われる（「嵯峨」は古く○○、袖中五112-2K京＝秋永1987）。

ただし、『正節』の譜記からは語単独のアクセント型が不明で、ただ助詞「の」接続形にだけ●●▼に対応する譜記が見られる場合は、第一類相当の場合も、第三類相当の場合も両方の可能性があり、さらに第二類相当の場合さえある。以下の諸語がそれである。

重(しげ)・坪・御簾・棕(むく＝植物名)・旨・盛(もり)・痴癡(をこ) 以上普通名詞
安芸・安部・阿野・壺岐・伊豆・宇多・江見・蒲・多田・那須 以上固有名詞

普通名詞に扱った「重(しげ)」「盛(もり)」はともに、その文字のことを指して用いた例。「旨」は『正節』に●●型(《白声・口説》とも)と●○型(《白声》のみ)との例がある。古来●●型であったところ、近世以降●○型もあらわれ、現代京都は●○(索篇・日国、中井は●●も掲載)。「坪」は現代京都●●(索篇・日国・中井)、「御簾」も●●(索篇・日国・中井は●○も)、一方「痴癡」は●○(日国)である。

5. それでは漢語の場合はどうか。2拍の一字漢語で、もと呉音平声または呉音入声であったものは、和語の第三類相当の語と同様の変化を遂げたと思われる。金田一春彦(1980)に掲げられた漢語のうち「b類」とされるものと特殊拍などの関係で東京において下がり目が1拍前にずれて対応する「b'類」とがこれに当る(【表3-1】以下ではともに「k補3」と表示)。《早語類》にも一部日常漢語を類別している。なお「京・天」は金田一(同:96)で「x類」とされたが、その諸方言アクセントの対応から「b'類」に似るのでいましばらくここに掲げておく。「京」は熱田本に〈平〉(九16オ7ほか=山田1960、以下同様)とある。「天」は漢音によるか。『国訛』に「天ノ字平声ニ唱ベキ事ナレ共大畧去声ニ唱来レリ天道天下天地ノ類ナリ 天上ハ上ニ響カシテ平」(4オ7)とあり、秋永(1983:75)に詳しい解説があるが、「天上」は『正節』では○●○○に対応する譜記(口1)がみられる。「上ニ響カシテ平」とは一旦○●と上昇して、後は低く平らということであろう。「上」に傍線があるのは、文字ではなく音調を指すと解する。

「陣」は、諸方言アクセントの対応から金田一(1980)で「b'類の語」とされたものであるが、(4)に掲げるように「陣」には○●型と思しき譜記が認められる。ただし、現代京都は●○(索篇・日国・中井)。もっとも『正節』で○●型と推定する根拠となったものはみな《口説》の例で、《白声》の唯一の例は●○型に対応する譜記であり、これの方が江戸中期の京都アクセントを反映したものかもしれない。また「陣」は、呉音ヂン去声(《去濁》色葉上65カ2・古今85、「地人〈平濁去〉反」法単128-4.)であるから古くは○●だったと思しく、《口説》の譜記はそれを伝えているのであろう⁽⁴⁾。

(4) 陣のあはひ { × × 上 × × × } 6下藤戸17-3口説・13上俱利1-3口説 / 陣の座に { × 上 コ × × } 11下座流6-4口説 / 陣ならば { 上 × × × × } 12上御産17-4素声 [早京 A(同)、尾京〈野朱注〉 { × 上 × × × × }]

つぎに「一」の●●▽欄の追記5例のうち「一の御子」の例は(5)のとおり。「一の」に○○▽ > ●●▽の変化を考える向きもあろうが、和語では第三類相当の諸語がほとんど●●▽で、一部特別な語句でのみ●●▽があらわれたことを勘案すれば、「一の御子」という熟語であるから古くすでに複合して○○▽●●だったと推定される。そこからこれ全体がアクセント変化の単位になって●●▽○○に変化したと考えてよいのではないか⁽⁵⁾。

(5) 一の御 <ミ> 子 { 上 上 × × × } 4下那都13-5素声・20-2口説・20-5口説

【表 3-1】『平家正節』所載の二拍名詞第三類相当の助詞「の」接続形アクセント（一字漢語）

語形	漢字 表記	品詞	類別	●○▽		●●▽		●●▼		その他
				白声	口説	白声	口説	白声	口説	
きん	【琴】		(w3(×))						1	
かち	【褐】		(w3#)		3					
いち	【一】		(k 補3)			+1	+4	2+11	1+15	(+A)
もん	【門】		(k 補3)					4	11	
きやう	【京】		k 補 x						1	
てん	【天】		k 補 x					1	1	
ぢん	【陣】		(*k 補3)							5
あん	【案】					1	6			
えん	【椽】								2	
かう	【剛】							2	2	
きやう	【卿】				1					
くわん	【官】								1	
こう	【功】				1					
しう	【周】			1	1					
しゆう	【主】							2	3	
しん	【秦】	国名			1			1		
せい	【勢】				2			5	9	
ぢやう	【鉦】			1						
べん	【弁】								1	
りう	【龍】				1					
ゐん	【院】							2+7	6+17	(+B)
延語数合計				2	10	1(+1)	6(+4)	19(+18)	39(+32)	5
				12		7(+5)		58(+50)		
異語数合計				2	7	1(+1)	1(+1)	8	12	1
				8		1(+1)		13		

注1 「ぢん」【陣】 *類別の「k 補3」は適當ではない。→本文注(4)

注2 (+A) いちのうへ【一上】、いちのたに【一谷】地名、いちのひと【一人】、いちのみこ【一御子】、いちのみや【一宮】 (+B) ゐんのごしょ【院御所】、ゐんのちやう【院庁】

ここに説明した「陣」の全例と「一」の一部を除けば、2拍一字漢語の助詞「の」接続形アクセントは●●▼が優勢であること、和語の場合と変わらない。ただし、全体の語数や例数が少ないので確かなことは言えない。「褐」(色葉「褐衣 カチ<平平>」上9876)は古く○○であるが、『正節』では助詞「の」接続形●○▽。諸本も譜記に異同はない。

6. これ以外の2拍一字漢語で『正節』の譜記から第二・第三類相当と推定されるものには「案・

椽・剛・卿・官・功・周・主・秦・勢・錠・弁・龍・院 などがある。2拍一字漢語（呉音形）の場合、語単独形●○であれば、もと○○であることはほぼ確定的といってよい。とすれば助詞「の」接続形が●○▽であれば第三類相当に相違なく（第一類相当なら●●▽、第四類相当なら○●▽）、また●●▽のごときも第一類・第四類相当の語にあらわれようはずがないから、これらの場合はそれだけから古く語単独で○○型と推定できよう。

「案」は《早語類》に類別認定されていないが、古くは○○か（色業「案アンス<平平平>」下36ㄗ4）。『正節』には●●▽（「案の如く」白1口6）と対応する譜記ばかりで、古く○○であれば都合がよい。現代京都●○（索篇・日国・中井）とも符合する。

●●▽は「剛」（漢音平声、白2口2）、「官」（漢音平声、口1）、「主」（シユは平声、熱田本でもく平）八7ㄗ2・10、白2口3）、「弁」（呉音平声、口1）、「院」（観本名義「俗云キン<平平>」法中22ㄗ5、白2口6）にあらわれる。「院」は『国訛』に「院{上下}平ヲ兼院{平平}宣」（6ㄗ4）とある。秋永(1983:72)は「「院」は去声だが「院宣」の時の「院」は平ら故、「平ヲ兼」というか」と解説する。この場合の「去声」は●○、「院宣」は『正節』では●●●○であるが、『国訛』は「院」の部分●●だけを注記して{平平}と記した（この場合{ }内の「上」は右上がりの、「下」は右下がりの、「平」は平らな線条譜をさす）⁽⁶⁾。

●○▽のみの語は次の5語である。「龍」（口1）は呉音に由来するとすれば、近世前期以前のいずれかの時点で類別を変えたのではないか。「卿」（口1、(6)第一例「頼朝の」の部分は、いわゆる「特殊低起式表記」は『国訛』（4ㄗ1）に{上下}の譜もある。「功」（漢音平声、口1）、「周」（漢音平声、白1口1）はともに助詞「の」接続形のみ。「錠」（呉音ヂャウ）は語単独で●○型（白2口1）のほかに●●型（白1→(6)）もあらわれる。このうち助詞「の」接続形は●○▽（白1）。『近松』（坂本1987）も語単独で●●型と●○型の両様だという。現代京都は●○（索篇・日国・中井）。「秦」（漢音平声、●●▽白1：●○▽口1）、「勢」（セイ平声か、●●▽白5口9：●○▽口2→(6)）いずれも「の」が主格の例）は両様。

(6) 頼朝の卿の{××××上×××}4下吉田2-5口説／錠さ、れなんず{上上上×××××}4上小督35-4素声〔尾京<野本朱注>芸{同}、早京<墨>{上上××××××}〕／勢の付かぬ先きに{上×××××××}7上東下1-3口説

7. 2拍二字漢語は、類別が明確なものに「琵琶」（図本名義<平濁平>170-5、京本和名<平平>6-50ㄗ9ほか）がある。助詞「の」接続形は●○▽。そのほか「奇異・供奉・化度・御所・後世・*五位・左右・座主・(入御)・守護・(衆徒)・*修理・*諸衛・四位・遅々・二位・*無二・*無始・*流布・衛府」20語（ほかに「義家」人名）は、『正節』に<助詞「の」接続形●○▽に対応する譜記であられるか>、または<語単独で●○型の確かな例があり、かつ助詞「の」接続形●●▽があらわれるか（下線の語、下に波線は両様）>のいずれかである（*印は、第二類相当と推

【表3-2】『平家正節』所載の二拍名詞第二・三類相当の助詞「の」接続形アクセント（二字漢語）

語形	漢字表記	品詞	類別	●○▽		●●▽		●●▼		その他
				白声	口説	白声	口説	白声	口説	
びは	【琵琶】		(w3×)	1	1					
きい	【奇異】			1						
ぎか	【義家】	人名		1						
ぐぶ	【供奉】			2	4					
けど	【化度】				1					
ごしよ	【御所】			1	4			2	3	
ごせ	【後世】				1					
ごゐ	【五位】			1	3					
さう	【左右】							4	1	
ざす	【座主】				2					
じゅぎよ	【入御】			1	2					
しゅご	【守護】							5	9	
しゅと	【衆徒】							2	2	
しゅり	【修理】			1+2	2+1					(+A)
しよゑ	【諸衛】				1					
しゐ	【四位】			3	1				1	
ちち	【遲遲】				1					
にゐ	【二位】							3	6	
むに	【無二】				1					
むし	【無始】				1					
るふ	【流布】				1					
ゑふ	【衛府】							1		
延語数合計				12(+2)	26(+1)	0	0	17	22	0
				38(+3)				39		
異語数合計				9	15	0	0	6	6	0
				17				7		

注1 (+A)しゅりのだゐぶ【修理大夫】

定されるもの、それ以外は第三類相当か。「入御・衆徒」には疑問も残る。なお人名「ぎか(義家)」はともに漢音読みで〈去平〉から変化した第二類相当の●○であったろう。気付くことは助詞「の」接続形●●▼をとる漢語は、その出自アクセント型が○●だったものに限られていそうなことである。ただし第三類相当の2拍二字漢語がすべて●●▼をとるというわけではない。また一方助詞「の」接続形●○▽は第二・第三類相当いずれの漢語にもあらわれるアクセントだが、第二類相当の漢語は●○▽以外のアクセントはとらない。この点、和語の傾向が逆転している(【表3-2】参照)。

8. それでは『正節』の譜記からは類別を明らかにできず、ただ助詞「の」接続形に●●▼をとるだけの漢語はどう処理したらよいであろうか（すでに単独形などから●●型であることが分っているものは除く）。それが2拍一字漢語ならば第一類相当と第三類相当の可能性が高く、それが2拍二字漢語ならば第一・第二・第三類相当それぞれの可能性がある。

いま2拍一字漢語で、そのような例を挙げるならば「客(かく)・漢・*庄・俗(しよく)・*新・帥(そつ)・大・答・*壇・庁・朝・頭・*牢・膈・寮」(*印を付したのは固有名詞並みのもの)15語である。このうち「漢」「大」は呉音平声による(熱田本「大く平濁」ノ眼 五1675)。「庁」も「庁く平」ノ使(熱田本二174)とある。「朝」は朝廷の意ならば漢音テウ平声、「頭」「寮」「新」も漢音平声によるか。「壇」をもし仮に「壇の浦」から切り出すとすれば、「音但く平」俗云本音之濁(図本名義224-4)とある。

2拍二字漢語には「倚廬(いろ)・右馬・左馬・儒家・従下(じゅげ)・主馬(しゅめ)・修羅・他家・頭陀(づだ)・度々・武家・父母(おも)」の12語がある。漢字音からすると、このうち「主馬・度々・父母」などは第三類相当であろう。「修羅・頭陀(梵語音訳語)・他家・武家」は第一類相当か。

9. 『平家正節』所載の二拍名詞、とくに第二類・第三類相当の語における助詞「の」接続形アクセントについては、以下のようなことが明らかになった。第四類・第五類相当の語についても、結論のみここに記す。これらはほぼ近世中期の京都アクセントを反映するものとみてよいであろう。

- (1) 第二類相当の和語は●○▽が多いが、●●▼もある(同じ語に両様も)。●●▽はほとんどない。
- (2) 第二類相当の2拍二字漢語は●○▽だけである。
- (3) 第三類相当の和語は、特別な場合(固有名詞や漢文訓読に由来するものなど)以外ほとんど●●▼である。
- (4) 第三類相当の和語には●●▽をとるものもあるが、それらは複合語や固有名詞の一部になりきったものがほとんどであり、古く複合した形で「体系変化」を経た可能性をうかがわせるものもある。
- (5) 第三類相当の2拍一字漢語は●●▼が多いが、●○▽もある(同じ語で両様も)。●●▽もあるが数は少なく、古い複合を思わせる語にあらわれる。
- (6) 第三類相当の2拍二字漢語は●●▼と●○▽とがともにあらわれる(同じ語で両様も)。
- (7) 第四類相当の和語はほとんどが○●▽であるが、一部に○●▼～○○▼もあらわれる(同じ語で両様もあるか)。
- (8) 第四類相当の2拍一字漢語も2拍二字漢語も、ほとんど○●▼～○○▼である(一部は○●

▽も)。

(9) 第五類相当の和語はすべて○●▽であらわれる。

以上のことから、第二・第三類相当の語について助詞「の」接続形だけから類別を決定するためには、以下のことが言える。

(10) 和語の場合●○▽であればほぼ第二類相当、●●▽であれば第三類相当と考えられる。●●▽はいずれにもあらわれる(さらに第一類相当の語も)。

(11) 2拍二字漢語の場合は、第二類相当であれば●○▽であるから、●●▽ならば第三類相当である。

また第四・第五類相当の語について助詞「の」接続形だけから類別を決定するためには、以下のことが言える。

(12) 和語も漢語も○●▽~○○▽であれば第四類相当である(漢語に第五類相当のものは少ない)。

注

- (1) 「苔」は第三類相当の語であるが、単独形に以下のような第一類相当かと思わせる譜記がある。助詞「の」接続形は●●▽(白2)で第一類・第三類いずれとも解釈可能なもの。単独形が《口説》の例であることも気になるが、あるいは「苔むす」「苔深し」という一まとまりの音調を伝えたのかもしれない。「苔むしたるが{上コ×××××}」(14下坂落13-3口説〔尾早京B{同}、芸「苔くこげ>蒸くむし>たるが」{同}〕、「苔ヶ深し{上上コ××}」(3上少還18-3口説)
- (2) 奥村(1993:53)では、この箇所「関{上×}」の譜記を誤記と解することを穏当かとしながらも、なお第二類相当の語が助詞「の」接続形で●○▽のほか●●▽もとることをもって、第二・第三類の「合併に関する類推的体系性の所産」という考え方をとる。しかし「関」のごとき第三類相当の語は、とくに事情が無い限り●○▽をとることは無いと言ってよい。
- (3) 奥村(1981:328-329)は、本稿でいう第二・第三類相当の語に助詞「の」が接続した形のアクセントを問題にして次のように述べる。

「2n2類+助詞ノ」の形には、「石の=上××」の如き●○▽型の他、「池の=上上上、家の=上上×」など、●●▽型や●●▽型の例も存する。従って二拍名詞に助詞「ノ」の付いた形の●●▽型例は、2n1類・2n2類(筆者注:それぞれ本稿でいう第一類相当、第二・第三類相当にあたる)両様の解釈が可能である。

(筆者注:例示された譜記の箇所表示は省略した)

第二・第三類所属語を一まとめ(2n2類)にして論ずればこのような理解もできようが、これを区別した方が傾向がよくわかる。また「池の」に●●▽、「家の」に●●▽があらわれるというが、その場合の「池の」には「池の大納言/中納言」や「池の禪尼」の例が含まれているようである。普通名詞の例は【表2】にあるとおり。本稿では、このような固有名詞の一部になっているものを一般の例と一緒にして数えることはしない立場をとる。「家の」●●▽は「家の子」の例で、ほかは●●▽である。本稿では「家の子」は4拍の名詞として扱ったので、【表2】においては追記にまわした。【表3-1】所載の「一の」も同様。熟語その他、固有名詞的なものを除くと、●●▽は、第二類相当の語では「供の」に、第三類相当の語では「波の」「案の」にしかあらわれない。

もちろん、江戸中期にすでに一語並みになっていたかどうかは、判定がむづかしい。秋永(1980:53)は「物の名・玉の緒」を挙げて、「複合が強く一語のようになったために」全体としていわゆる「体系変化」を経た結

果「直接●●○○型に変化したらしい」という。その推定はおそらく当を得たもので、ほかにもいくつかの例は挙げられよう。『正節』では、たとえば「言の葉(端)」「物の具」「物の怪(気)」「ものものふ」などみな揃って●●○○型だが、「気(け)」が1拍第三類相当であること(秋永1996:38-39)など、すべてを一律に古く複合した結果だとばかりは説明できない場合もある。

たとえば、「山の内」●●○○○(人名口1)、「山の手」●●●○(白1口2)なども2拍第三類相当の一般的傾向からして助詞「の」接続形●●▼であるから「山の手」は「分析的立場」でも説明できる(むしろまだその立場で説明すべきか)が、人を指して用いられる「山の内」を一緒に扱うことはないのではないか。「戌の刻」「午の刻」は○○○○○>●●●●○なのか、●●▼+●○>●●●●○なのか判定はむづかしいが、「卯の刻」「子の刻」がともに近世●●●○であり、また1拍第三類名詞の助詞「の」接続形が必ずしも●▼を一般的なアクセントとしないことを思うと、H(-1)型という定型化も考えられよう(「亥子の刻」も●●●○)。また「殊のほか」●●●○○(口3)も○○▼○●からの直接の変化形だとすればここで扱うことは慎重でありたい。

- (4) この点、奥村三雄(1974:27)は「陣」を第四類相当に入れているのと一致する。同(1981:579)にはこの語の記載がない。
- (5) ここに「一の御子」だけを取り上げたが、ほかにも【表3-1】に追記した「一の上」●●●○○(白1)も同様に考えられる。ただしこれは後部要素の「上(かみ)」○○によって(○○▼○>)●●●○○のようにあらわれたと解釈もできるから、「一の」●●▼の例にはしづらい。「一の人」●●▼○○(口1)は後部要素「人」●○が関係しているとみられよう。「一の宮」も●●▼○○(口1)●●▼○○(白1)両様ある。ただこのような「一の」●●▼は《口説》にしかあらわれない。《白声》はみな●●▼である。このことは和語についてもおよそ共通していて興味深い。二つの曲節を比較すると《口説》は伝承的音調を伝え、《白声》は江戸中期における京都の当代的音調を反映するとみることもできよう。なお「一の谷」(地名)は●●●●○(白7口10)。
- (6) 本稿では、それぞれ全体で一語並みとみて追記にまわしたが、「院」には「院の庁」●●●○○(白1口1)、「院の御所」●●●●○(白6口16)もある。もちろん一語並みとみたからといって「院の」という文節を切り出すことを妨げるものではない。しかし「庁」が古く○○(観本名義「俗音長<平>」法下54†4)であるとした場合に、「院の」の部分の扱うかぎりでは問題なくても、なぜ「庁」が～=●○とならずに～=○○と接続するのは、変化形なのか複合の問題なのか判然としない。もっとも「御所」は古く○○と思しく(近世以降は●○)、この場合は「院の」と「御所」とに分けて考えても結果として問題はないようである。

【参考文献】

- 秋永一枝(1972・74・80)『古今和歌集声点本の研究』資料篇・索引篇・研究篇上 校倉書房
 秋永一枝(1983)『言語国訛 竹柏園旧蔵本影印ならびに声譜索引』アクセント史資料研究会
 秋永一枝(1996)「東京弁における「気」のアクセント」『日本語学』15-7
 秋永一枝ほか(1997・1998)『日本語アクセント史総合資料 索引篇・研究篇』東京堂出版
 秋永一枝・後藤祥子(1987)『袖中抄 声点付語彙索引』アクセント史資料研究会
 奥村三雄(1974)「諸方言アクセント分派の時期—漢語アクセントの研究—」『方言研究叢書(広島方言研究所紀要)』第3巻 三祢井書店
 奥村三雄(1981)『平曲譜本の研究』桜楓社
 奥村三雄(1993)「平曲のことばと旋律—音楽性から語音形へ—」『平家琵琶—語りと音楽—』ひつじ書房
 金井英雄(1989)『補忘記 語彙篇 博士付和語索引』アクセント史資料研究会
 金田一春彦(1971)「音韻変化からアクセント変化へ」『金田一博士米寿記念論集』三省堂
 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的・原理と方法』埼書房
 金田一春彦(1980)「味噌よりは新しく茶よりは古い—アクセントから見た日本祖語と字音語—」『言語』9-4

- 坂本清恵（1987）『近松世話物浄瑠璃 胡麻章付語彙索引 体言篇』アクセント史資料研究会
 桜井茂治（1977）『新義真言宗伝『補忘記』の国語学的研究』桜楓社
 桜井茂治（1976）『中世国語アクセント史論考』桜楓社
 鈴木 豊（2003）『日本書紀 人皇卷諸本 声点付語彙索引』アクセント史資料研究会
 中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』勉誠出版
 平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』東京堂出版
 山田俊雄（1960）「真字熱田本平家物語の漢字に附けられた声点の価値」『成城芸芸』22

なお引用資料は明記しなかったもののみ以下に記す。(和名)馬淵和夫『和名類聚抄 古写本声点本 本文及び索引』(1973 風間書房) / (図本名義)『図書寮本類聚名義抄』本文編・解説索引編 (1976 勉誠社) / (観本名義)『類聚名義抄 観智院本』天理図書館善本叢書 (1976 八木書店) / (法単)『古辞書叢刊別巻 法華経単字』(1973 雄松堂書店) / (色葉)『尊経閣蔵三卷本 色葉字類抄』(1984 勉誠社) / (古今)『古今和歌集声点本の研究』資料篇・索引篇 (秋永一枝1972・74)

『平家正節』の譜本については、東京大学文学部国語研究室蔵本青洲文庫本を中心にし、これに尾崎本(影印1974 大学堂書店)、早大本(演劇博物館蔵『平家物語節附本』)、京大本(影印1971 臨川書店)、芸大本(附属図書館蔵『平家正節鈔』)を参照した。ただし諸本みな同じ場合はとくに注記しない。